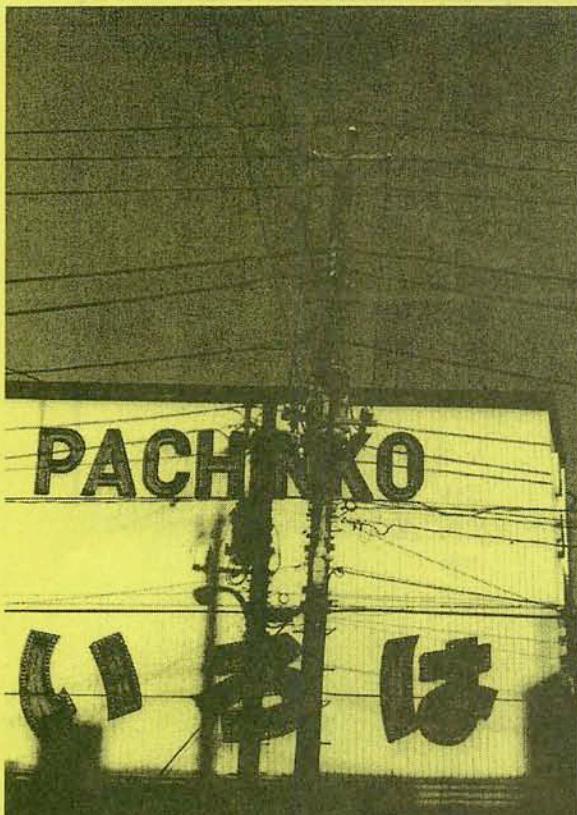


路上文芸総合雑誌『露 (Rojuku)宿』

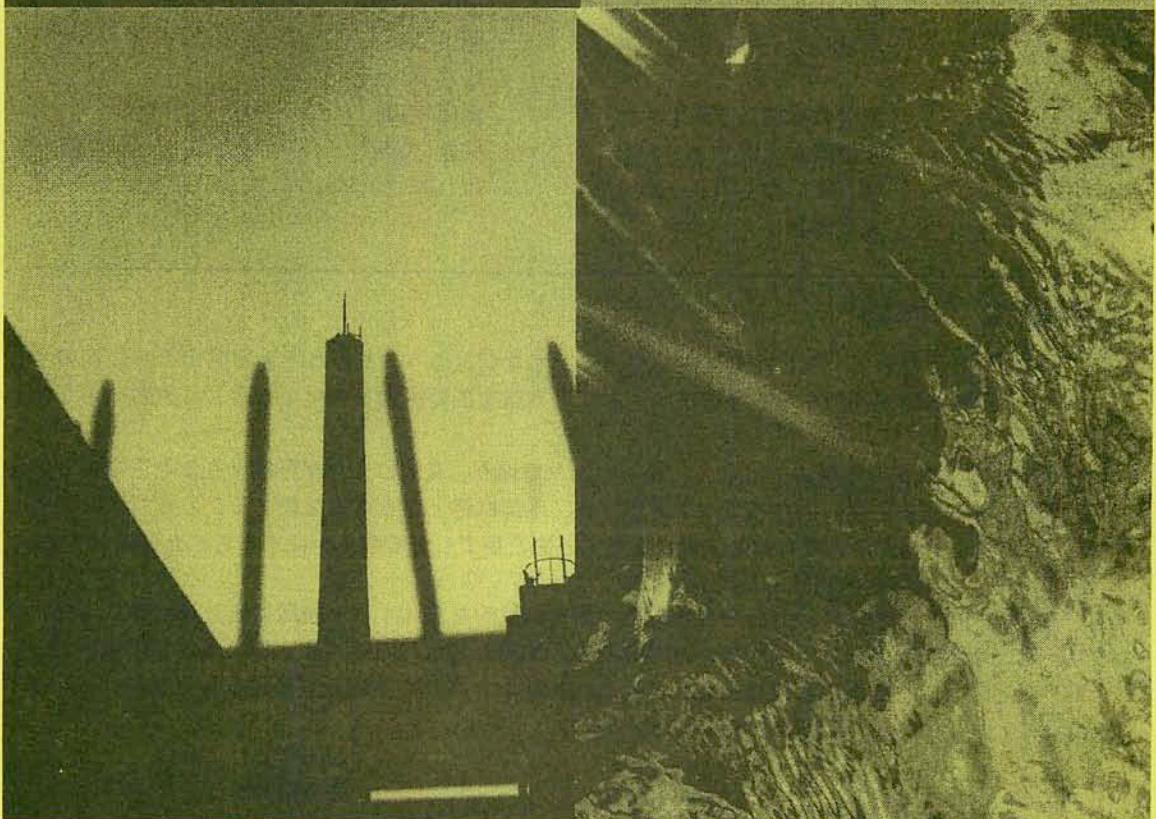
2000年2月25日



# 露宿

R  
o  
j  
u  
k  
u

第5号



定価 500円

## 露宿

### 目次

表紙写真	橋本 弘道	
文中写真	岡田 知子	
新春のご挨拶	露宿編集部	1
廿世紀レクイエム	富士森和行	2
短歌	清翠	3
歩む	遊心	
どこまでか	山根 澄雄	4
アルコール注意報	角本 輝幸	5
鳥のなげき	秋戸 空	6
新宿の路上生活者の 文芸誌に捧げる詩他	A・S・デービット	7
白い影	五林 修	8
日常の視点	田代 猛	9
我が人生を語る	宗春	11
都庁にて	水すまし	13
過去・現在・未来	松本 義雄	15
ききがき「私のきた道」	石山ひろと	16
北国の街から一路上写真展の片隅で	大久保	21
越冬とともに過ごしたなかで	折口 文	23
絵本の世界	恩田 美代子	24
ぼくわたしらはみんないきている	恩田 美代子	25
東京路上ふらり散歩	岡田 知子	26
	笠井 和明	
露宿の本棚「下降生活者」	飯田 基晴	33
映画案内「ポンヌフの恋人」	関屋 光泰	35
はり師いが丸の肝心かなめ	はり師いが丸	37
編集後記		38

## 新春のご挨拶

2月の終りになって、あけましておめでとう、もないと思うのだけれども本号が今年最初の号だけに一応新春のご挨拶を申しあげます。本年も本誌をご愛顧賜りますよう宜しくお願ひ申しあげます。

「野宿する人々が問題なのではなく、貧しい人々を作り、貧しい人々が野宿せざるを得ない社会が問題であると考えないのだろうか？／が、故、本誌は路上から言葉を発することを目的として創刊される。野宿する人々も同じ人間であることを言葉でもって明らかにすることを目的とする」（露宿創刊の辞、露宿創刊号より）

新世紀に向けた最後の年である今年もこの創刊の目的を忘れず、小綺麗にまとまる事なく路上の表現の可能性を追求して行きたいと存じます。沈鬱としたこの時代に一石を何としても投じる為、路上に埋もれた表現者を発掘して行きたいと考えています。路上の言葉を侮るなれ、路上の表現を侮るなれ、露宿は今年ものたうちまわります！

2000年2月25日  
露宿編集部 笠井 和明

# 廿世紀レクイエム 十三首

富士森 和行

わが干支の庚辰の絵馬展玉砂利を踏みて立ちおり二〇〇〇年の春  
(九段 初詣にて)  
放浪の二字に盡きたりみずからの一イデンティティと言へるもの

吾が秘める重荷明さず終らむや規制と戒めの抑圧の手錠

嬰児を抱えて撮る軍服の若き父らよ散りて廿世紀は

父娘かと思ふケースワーカー甲斐がいしく夕昏れのバス頬笑まし

銭湯に入れ歯洗ふさま不快なる眼差し向けてわれも老いつゝ

ミレニアムへ生き繼ぐ老いの足阻む自己負担のシルバー・バスとは何か

保護受けて六とせの春となりにしも心のケアの直むなしけれ

コンテナ・ターミナルに初荷が着きて巨船より出荷始る陽は麗しく

税関の塔にはためく日の丸を熱き眸に見し日も遙るかなり

冬の夜の雪に凍てつく道路截る身を切るごとき音に灯を消す

廿世紀のレクイエム何にもかも白紙に還へす術あらざらむ

描かれし汝れの容貌より滲み出るホームレスはホームレスの翳をやどして



## 短歌

清翠

子供等の笑顔の中を転院す  
むじやきな背中去りし夕暮れ  
病葉の老いの月日を数えつつ  
山間村は雪にうもれし  
南無大師唱える心不乱なり  
ねむれぬ朝に今日も生きぬく  
コツコツと歩くナースのくつの音  
明けゆく空に故里忍ぶ  
夕暮れは心寒しき冬の雪  
愛の温くもりほしきものなり  
逝く友の生き様見ゆる我が心  
生きる我が身に明日を問うなり

## 歩む

遊心

人に言いたくない人に言えない  
人に知られたくない

過去があり、現在があり、未来がある  
色々土地を渡り歩き、色々な仕事に付き  
色々な経験をしてきた

ある時は引き、ある時は妥協し

ある時は前進する

多くの友を得、国をとわず、多国籍の人達ち  
と知りあう、それが我々ホーム・レス  
山を越え、谷を越え、川を渡つて歩いてきた  
そして、これからも歩いて行く。

## 俳句

去年今年一本棒を通したり  
初明り苦病に負けじと手を合わす  
年賀して疎通をはかる友と友  
古里の匂い芳し雑煮かな  
初句会筆と短冊脇に置き

# どこまでか

山根澄雄

どこまでか  
どこまで来たのか  
どこまで行くのか  
ここはどこなのか

そんなこと分かりたくないのだが

知つたってどうにもならないのだけれど  
寒いと駄目だ  
かじかめばかじかむ程…

ここはどこだろう  
人々は襟を立て家路にかかる  
北風に吹かれた顔が能面のようだ  
でも  
その顔が緩む時があるから  
急ぎ足で帰るのか

知りたくはないよ  
何もかも、世の中全ての事だよ！

僕の心臓がドクン、ドクンと動いていることだけが  
世の中の全てだ

寂しいのかい？って、いやそうじやない  
つれないのかい？って、そうじやない  
暗い眼は生まれつきさ

たって、どうしようもないじやないか  
生まれつきなんだもの  
酒さえも明日を見させてくれない  
だからしょももないじやないか

知りたくもないよ  
知つてどうにかなるものなの？  
どうにもならないじやないか  
いいつか  
だつたら知りたくないよ

まつとうな人はまつとうな人生を送るだろう  
それが幸せなら、それで良い  
悪くはないよ、  
早く家に帰りな  
他人の不幸を見て笑いな  
思い切つて笑いな  
あになりたくないってな

でも  
ここはどこなのか  
どこまで行くのか  
どこまで来たのか  
どこまでかつて  
考えてみたことはあるかい？  
笑顔が凍ることつてないかい？  
不幸になつてみたくなる時つてないかい？  
そんな事知りたくないのだけれども  
ふと  
そう思う事つてないかい？

## ・アルコール注意報

最近 2人の仲間が 同時期に  
入院した。原因はアルコールの飲み  
すぎである。飲みすぎといつても  
オレたちが酒を買える金額など  
1ヶ月で、2人とも食事で1杯で  
すず飲むのが先なのだ。年1ヶ月  
寒さだ、2人とも一日中エサヒにいる。  
1人などは夜中のハトロールの仲間  
が通りかかるながら、たら凍死  
していく可能性もなきに付てあら  
すだ。去年の6月にも反対の1人  
がアルコールの飲みすぎで路上  
で死んでいたと発見されてる。  
知り合の仲間の死というものは  
ホントに立たる、想いのはま  
立たる。

アルコール

注意報

角本  
輝幸

数年前にホリ一番の反対が  
入院院であの世へ旅立った時  
など泣いて泣けてほんとに全身  
力が抜けたものだ。私も若の時  
はボトル1本毎日の人でも平気だった  
今は2合以上は絶対に飲まない。  
割前の話だ。金がないのはもちろん  
だが、タロー達生活10年以上  
やっていて身体がもつわけがない  
のだ。今は何かがその日その日を  
生きさせている事に感謝しているのだ。  
これから寒さがきびしくなる一方  
だから、お互いアルコールの飲み  
かただけは身を守っていただきたいと思う

T.K.

ぼくらのねどこだつた

〃穴〃の入り口に

〈アミ〉をかぶせてしまつたね

異種族の人よ

あなた方に森も取られてしまつた

ぼくらは、一体どこに

すみ付いたらしいのですか？

〃たて物〃の上にあつた

//穴〃が

ぼくらには、ちようどよい

すみよかつたすみ家だつたのに…

本当のことと言つて下さい！

異種族の人よ

ぼくらに一体何をしたのか

言つてください！

異種族よ……おお異種族よ、

自分で自分の首をしめているのに…

ぼくらの新しいすみ家も

うばつてしまつて、

気がすむのですか？

ぼくらの森もうばつてしまつたのに…

異種族の人よ！

ああ…異種族の人よ

ぼくらにどうで生きろと…涙、涙

ぼくらはみんな空でも

道ばたでもどこでも勝手（「自由」）に

死んでしまえといふのですか。

本当のことと言つて下さい！

異種族の人よ

本当のことと言つて下さい！

異種族の人よ

ぼくらに一体何をしたのか

言つてください！

異種族よ……おお異種族よ、

自分で自分の首をしめているのに…

ぼくらをどれだけ死なせたら

気がすむのですか？

ねえ、ぼくらの森をどこえ

やつてしまつたの？

やつてしまつたの？

ぼくらをどれだけ死なせたら

気がすむのですか？

ぼくらをどれだけ死なせたら

気がすむのですか？

ぼくらをどれだけ死なせたら

気がすむのですか？

ぼくらをどれだけ死なせたら

気がすむのですか？

ぼくらをどれだけ死なせたら

気がすむのですか？

ぼくらをどれだけ死なせたら

気がすむのですか？

秋戸 空

## 鳥のなけき

(〇〇年一月)

ああ、異種族よ！

# 新宿の路上生活者・の文芸誌!!

## 露宿に捧げる詩!!

A・S・デービット（作）

◇ 露宿 ◇

◇ろ→路上生活者を、他者から見た：

憐みと言う〈空間〉に…

我々（路上生活者）の心に内在するプライド

と言う

じ→〈時間〉を合致させて

ゆ→夢と現実のボーダー・ライン上を

往復する一大東京・新宿の天空に浮かぶー

く→雲：幻華の如き木の小雲!! UFO!!

そのUFOは、それ自身から産出する

永遠に美味なる勇氣と希望と言う

果実を、地上の我々仲間達に、

与え続けるだろう。

（二〇〇〇年一月一日）

## 聖殉流美矢產華乘鳴水池 セジュルビヤンカのなみだ

A・S・デービット（作）

◇聖なる夜、あなたを象徴する清き横顔から…  
一滴の涙が流れ落ちた。それが霧氷の聖衣と  
なり、その中から新しき生を受けた異次元の…  
あなたが幻出した。それは二千年続いたあな  
たの垢を完全に拭い去つたあなた自身の再生  
や蘇えりとは異質なお方である。

あなたは二千年間、清徳した世界中の無数の  
小羊の群れを果して救い得たのか？  
自問自答するまでもない。救い得なかつたと  
言う過酷な現実にあなたは、すべての涙が枯  
れ尽きるまで泣きに泣いた：全海水の如き多  
量の紅の血の涙を流しながら…。

あなたの役目は七色のアーチの奥津城に眠  
る『アーメン』と言う名の無限虚空の函にあ  
るお方を密封する使命だった。唯噫『真正大  
聖靈封印黙示之枢』であるバンドラの函が開  
きあなたの姿に似せた異質なあなた!! 救い主  
が一九九九年の聖なる最後の夜が明けた瞬間  
…から七日過ぎた…その時点に於いて……  
ミレニアム!! 二千年・今年の一月七日……

◇登場：したのである!!

# 白い影

五林 修

如実に世界のあり方を物語る路上にあつて精神における均衡を保つ。いま、この難しさを痛感します。

いつも、路上生活の背後には、見えない実体が、影として、つきまといます。

この青い色をした影は、世ふけに、我々をたづねて来るのです。

深い眠りにある我々の路上に、鮮やかな青をその身にまとい、エメラルドの輝きにも似た目でたづねて来るのです。

エメラルド・ブルーの泉から、ねむりを忘れた街で深いねむりに就いている我々を、たづねて来るのである。

影をもたない実体が影として、明け方まで語るその事は「世界のあり方」そのものなんです。

「世界のあり方」を路上において雄弁に語り終えそして、夜鳥の鳴く時間になると、私一人だけを天空へと招くのです。

天空には、アルベールの手によつて設計された、「世界をのぞむ家」があり、その窓には、絶えることなく、太陽に向かつて突き進む光の束が備えられており、微笑に満ちた労働を見守る夜空の星群がちりばめられた輝きを誇つているんです。

路上に生きる我々が、絶望の淵にあり、

また孤独の果てにあり、その先に見事に準備された痛ましい現実のなかにおいて倒れている時……。

影をもたない真実の実体は、ひそやかな声で、やさしく世界における路上生活者のあり方を、教えるように戒めるよう、物事を正すように、そして路上に生きる我々を教育するかのように、青の装いを棄て去り赤の装束をもつて、語るのである。

また、天空にある「世界をのぞむ家」は、この地上のしかるべき場所に、その礎えを定めるのですが、その場が如実に世界を凝図として反映しているこの路上であると、「断言」するのです。

東京におけると同様の現実が、国内だけではなく世界に満ちている事を「断言」するのです。

やさしい無関心を装ふ事は、いま、この時は許されています。

赤い影をもつた光の束が、備えられた「世界をのぞむ家」の窓、また微笑に満ちあふれた労働を見守る星群は、路上で生きる仲間一人一人を知つています。

やさしさを、無関心で擬裝する東京を、許す訳にはいきません。

# 日常への視点。

## (共に生きよう)

正しいことを言うときは、少しひかえめにする  
ほうがいい。  
正しいこと言うときは、相手を傷つけやすいも  
のだと気付いているほうがいい。

これは吉野弘さんの詩（祝婚歌）の一節です。直球だけ投げていてはどんな速球でも打たれる。やはり緩急の差をつけなければ単調になってしまふと言ふ意味でせう。大体百パーセント正しい人間などいないし、百パーセント正しい行為と言うものもないでせうが、生きて行く為には人間は何か食べる。肉でも、魚でも、それは生命を奪う行為であり、菜食主義者といつても、その（罪）から免れることはできないと思ひます。僕は政治

や行政の権力を批判するのに（ひかえめ）にしろとは思はないし、傷つけすぎるものではないと考えます。（正しいこと）は多くの人間を疲れさせます。特に現代社会においてはなおさらと思ひます。唯思ひますのは（正しいこと）を主張する方法を工夫しなければならないと考えます。

一月六日、毎日新聞に石原都知事の年頭インタビューの談話の中で（高齢者は可分所得が多い）（麦飯食べても死ぬわけじゃない）そんな言葉が多く見られました。戦後の池田勇人（首相）が（貧乏人は麦飯を食え）と言つて、社会の批判を受け、総選挙で大敗をし、首相の座を下りたことを想起致します。要は身分相応の暮らしをせよと言うことでせうか。でも現実に、政治の貧困の為、働ける仕事を、必死に、必死に、探がせどもなく、麦飯さえ食べられない多くの人々がゐます。石原知事よ都庁の屋上よりすぐ側の眼下を良く眼を開いて見て下さいと言葉を返したい。すぐ眼下に二百五十の人々の青色のビニールシートのダンボール住いがあると言う事実を眼と心を開いて見て下さいと、この年末より正月に向けて行政が休みの為、有志の人々が（新宿連絡会）血のにじむ努力で多くの、多くの、人々の生命を全うさせた厳肅な事を。僕も或る人に接しましたが、頬に熱き涙を流しながら暖い食を食べてゐた姿を見ました。

これは行政の行うべき一つの重大な施策だと僕は思ひます。石原さん。貴方も前知事、青島さんと同じ政治信念でせうかと強く言葉を返したい。貴方の若き時代、芥川賞（太陽の季節）僕も文学を愛好する一人としてあの頃のあの純粹な心に戻つて下さいと思ひます。亡くなつた評論家の大宅荳一さんが貴方のこと将來は政治家になる人間だが、あれは政治の泥にまみれない人間だと著書に記してありました。石原さん政治に嫌気がさして議員を辞められたのでせうが政治の泥に余りしみこまないで下さい。心が趣きましたら、昼休でも歩いてほんの五分です、ダンボール住いの人々と雑談でもして見ませんか。人生経験豊富な人達ですよ。そして良い人達ですよ。そしたら文学や政治や行政の一つ大きな糧にもなりませうと考えますが……。

一月初めのニューヨータイムス・ワシントンボストンに写真入り（隅田川周辺）で、日本は世界で民主主義国家で平等と言うこと良く知られてゐる国だが今日の社会は貧富の差がどんどんと多くなつてゐると記してありました。そしてホームレスの人々が急増してゐるとも記してありました。日本の政治家よ選挙選挙に狂奔しないで日々の社会に直視せよと言ひたい。

これでは今年は自立センター設立の道は多難な一年と考えざるを得ません。友人よ仲間よ、一月、二月は嚴冬を迎えます。でも暖かい春がきっと訪れて来ます。そして野道に小さな小さな草花が人の心を慰めます。僕達も小さな名もない草花ですが、共に手を取り合つて現実の重圧を己の意志と皆の友愛の心で、生きませう。生きるんだ。頑張らう。頑張るんだ。共に生きよう生きるんだ。

踏まれても、倒れても、泥にまみれても  
泥中に根をもつ 名もなき小さな草花は  
凜として咲きつづける。永遠に咲きつづける。

名もなき草花の一人

田代 猛

\*\*\*\*\*

## 宗春

# 我が人生を語る

一九三六年静岡市内生れです。

生れて三ヶ月で母親と別れて祖父に育てられました。ぼくの父親は顔も名前も知らずに子供の頃は生みの母も知らない状況でした。

それから祖父母が亡くなつて母親の生れ里の小父さん小母さんの所で、戦前戦中戦後の苦しい時代を新生中学校まで小父さんの所にて苦難の道を歩みます。

戦後は田舎でも食事が少くお腹をすかす毎日で子供の頃は小学校は休みがちで三学期の中で二学期位は家の手伝いで勉学もろくに出来ない毎日でした。

いつも試験はみんなと並べれば悪い点で先生にいつも注意されて恥かしい思いで小母さんの子供を背おいながら教科書を片手に一生懸命に色々と勉強する毎日でした。

いつも小母さんに他人の子供を育てるなんてといじめられました。手に持ったもので頭をなぐる、ある時は頭から血を流すほどケガをして、ぼくはどうしてこの世に生まれて来たかと、生みの母をうらみました。

そうです小学校四年生の時です。いつものように子守をしていた時です。いきなりぼくの手を取り、何も言わずに両手を後ろにしばられて、手ぬぐいを口の中に入れさるぐつわをはめられ、両足もししばられて、枝の間にほうり出され、けるなぐるの暴力をして、動かなくなると小母は外に出ていきました。

足のひもがとれて私は夢中で外にとび出して逃げ出した。其の時同級生の女の子に両手のひもをとつてもらい、ひどい事するネと女の子は同情して泣いていました。今でもその同級生の女の子の名前は忘れません。

それからどう歩いたか分からぬが我にかえつていた時はあたりは暗くなつていきました。近所の人達がぼくをさがしているのに気づいた時はもう夜の十二時頃、近所の人と一緒にあやまつて家に入れもらいました。

その夜は寝てからも色々と考えて口の中に手ぬぐいやさるぐつはで私の生命はこれでおわり、四年生の夏の夜、あの時死んでいれば良かったと考えました。でも義務教育の間ここで育ててくれた小父さん、小母さんは、他人の子供を一人育てることもたいていのことではなく、大変なことと思うようになり、イジメられたり、なぐられても小父さん、小母さんありがとうと感謝をしています。

それから中学校を卒業して独立、生みの母親の親類から力を貸してもらい手に職、理容、床屋の修行に入ることとなりました。

若い時は、理容師の免許を取り色々とチャレンジにのりました。二十一歳の時念願の店を持ち、二十四歳の時妻を取り、幸せな月日が流れました。けれど貧乏のことなので七年

## 路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

間の理容店を手はなすはめになりしかたなくぼくは妻を家に置いて、又職人として単独で東京で教育師として東京の学校で教師をして、多くの理容師と共に色々な面で勉強するようになり、多くの人々と出会いました。

そんなある日妻が突然の急死で妻が三十三歳の若さで亡くなり一人息子は妻のおふくろさんにたくして、ぼくは目の前が真白な状態がつづき、それで駄目人間になってしまふと友人からもはげまされ又元の床屋の仕事に、子供のために理容師として生れ故郷の静岡で働くことになりましたが、又不幸が来たのです。店から家に帰る途中で交通事故にあい足の骨二本おるケガをしてしまい、なおっても歩くことが不自由で立つことが重苦しくやむなく転職しホテルのフロントをしたり、又東京へ出て来てホテルに勤めるようになりと、思うようにならない自分に腹立たしい日々でした。

一氣転回、建築土木の職業につき早十年の年月が流れ、昨年の五月迄仕事がありましたが、現在不況のあおり又年取つたことでやむなく今は野宿者として昔の仕事、床屋を生かし仲間の野宿者、ホームレスの仲間の頭を刈つています。でもホームレスの人達仕事ない事、お金のないこと、風呂に行けず頭を洗うこともなく、苦難の道を歩いている仲間ですので器具が切れなくなることが早くて善意のお金でトイシは買い、又髭剃りは沢山送つて戴いているのです。善意のカンパ有難度うございました。御礼申し上げます。

少し横道にそれましたが我が人生を語ることはまだまだ沢山ありますが先ずこれまで。

### 意見広口

八代郵政大臣 様

50円+5円と80円+5円の国家財政再建の寄付金付ハガキ、切手を発行して下さい！！

大蔵大臣 様

将来的にプレミアムが付くデザインの2000円寄付国債、1000円寄付国債の発行をお願いします。国家財政再建はホームレス救済です。

五渕 四郎

2000年(平成12年)2月

## 都庁にて

十月八日都庁前アピール、十五日大阪の人達を含めての都庁へのデモが行なわれた。人数は何百人であつたろうか。先頭は大きな赤旗をかかげ、それぞれにプラカードを持ち、とても勇壮な行進であつた。八日の都庁前行動では私はビラ配りをした。主に都庁から出てくる人達へのビラ配りではあつたが、そこへ一人の都庁付ガードマンが現れビラをくまなく読んでいるらしかった。とても私達の行動に関心があるらしく「稻葉さんはあまりスピーチしないんですか」と聞いてくる。私は彼はコレコレこうでと説明する。今は大きな会社がバタバタと倒産し、外国の会社と合併したり、世界でもホームレスはいっぱいいる。都庁のホームレス関係の人達も数年前は会おうとさえしなかつた事も少し明かす。それらを聞いてガードマン氏「少しやる事が遅すぎるんだよナ！」と喝破してくれました。快挙じやないですか。

そこへ笠井さんがカンパ箱のそばに居る時に都庁の課長さんが「お話しが聞きたいんですけど」（ホームレスが入る建物の事）と言つて千円カンパをしてくれて行つた。私はあまりにいい情景に見とれてお礼も言わずにここ誌上を借りて「課長さん有りがとう御座いました」と申しあげます。

この課長さんは都庁が会わない、会わないとつづぱつていて、その果てに初めて団体交渉に現れた時の課長さんの中の一人でした。私がカレーで並んでいた時も「ガンバッテ下さい」と声をかけてくれた人です。

千円のお金をカンパして下さつた事もうれしいですが、数年前の交渉を断わられ続けていた頃の事を想い、この様に言ってくれる迄に変わってきたんだなと思い感無量な気がします。

笠井さんは無言でいましたが、どのように感じられたでしょうか。いろんな事が変わつてくる。運動している人達の醍醐味はこの様なところにあるんではないでしょうか…。

さて、十五日の日都庁前で私はデモ行進を待つていました。そこへこの前のガードマン氏がまるで皇居付きのガードマンかと思う程の帽子付きの立派な服装で現れました。八日の日も他のガードマンとはなれ、一人で私の近くに来、十五日の日もあのローマの大円柱にも見える柱の後ろからスーと現れたのです。まるで神様がよこされたかのように…。

そして御自分が大手町の都庁から来た事などを話されホームレス達をとても友好的に想つてくれている様子なのです。ホームレスが都庁の駐輪場の所にねかしてもらっているのは「笠井さんがとても適切な処理をとつてくれた」とすごくほめていました。何やかにやと言う人もいるなかで、こういう事を言われた事つてうれしいですよね。

静かだし品がいいし、とてもガードマンという感じしないんですね。那人：純な感じの人なんです。デモ隊を迎えるために私は「貴方の事を本に書きますから」と言つて別れきました。

デモ：もう皆の入る家が出来るとしたら、デモを見るのも、これが最後かなあ、などと思つて見送つてきました。

あのガードマン氏の事をスープの会のKさんに話したら「そのガードマンに会える?」ですって…この人も又純ですね。純な人同士つてお互に引き会うんでしょうか。お逢いになりたい方は、お名前をコツソリ教えますから逢いに行つて下さい。都庁のガードマン氏ですよ。

(水すまし)

過去

## 現在・未来

### 路上生活者の赤裸な姿)

今、私は私の父と思つてゐる人に口述代筆してもらつてゐます。この人に失礼と思ひますが許して下さい。私はこの人に路上に生きる真実の本当の本当の生きた声を生きた真実をこの露宿に反映して一人でも多くの多くの人々に日々の私達の生活の実態を語り理解して頂き、政治行政の人々にも私達の生活の実態を認識して頂きたいとの強いての願ひでしたので裸の姿の心を語りたいと思ひます。

私も露宿を一号よりずっと見てゐますが、余りにも言葉のキレイごとが多く見られます。路上の人々に無縁な詩や言葉が多く記してあります。残念です。そう仲間も思つてゐます。又この機会に日曜の炊出しに心から感謝致します。一週間一回の米のご飯を食べさせて頂き口と心で噛みしめ感謝の心で食べさせて頂いてゐます。有難う。有難う。生きる喜びが心にわいて来ます。仲間も同じ気持ちです。

私は義務教育も出てみません。家庭の事情で父は出奔し母は家出、幼い頃より妹と一緒に孤児院に入れられ砂漠のような幼い頃の人生でした。中学中退、少年院行き、グレタ、グレタ、青春時代でした。そして出所後広域暴力団入り、刑務所と社会の往復の人生でした。でもふと知った事で（長くなりますが話しません）足を洗ひ、自らの人生を再出発致しました。そして肉体労働

者として建設現場を転々とした人生でした。私は生きる手段として学もなく自らの肉体を鞭打ちつことが、最大の生活の手段でした。でもこの不況で建設現場が皆無で遂に野宿労働者となりました。現在は新宿公園にてダンボール住まいをしてみます。朝三、四時に起きて高田馬場に仕事を探しに行つてみます。でもほとんど仕事はありません。自らの力で人の手を借りないで生きたいと考えて必死に必死に毎朝起きて行つてみます。神に祈るような心で行つてみます。そんな私に今代筆してゐる人と知り合ひ、言葉に言えないような暖いことを物心両面にわたり受けてみます。

父親の愛情など知らない私ですが初めて父親に会つたような心です。そして生きる喜びを教えて頂きました。私はむつかしいことは解りませんが今の世の中で自分のことしか考えない人ばかりなのに本当に本当に涙の出るような親切を受けてみます。仕事をえあればと毎日毎日行つてみます。時々暗い心、空しい心になりますが、いつもいつも励まされて生きてみます。私のような人間ですが過去、現在、未来はあります。現在は苦しい苦しい日々ですがそれを乗りこえて明日の日に楽しい未来に向かって生きようと思ひます。恥しいことばかり話して許して下さい。

明日も又、早朝三、四時に起きて手配師（建設現場）の仕事を探しに行きます。底冷えのする毎朝です。でも頑張ります。それしか生きる道はありません。頑張ります。

新宿公園ダンボール住

松本 義雄

追記・この代筆を夕暮時の公園の街灯のすぐ側のベンチで記してゐます。語る彼の顔に怒りと悲しい表情をおぼえます。路上に湧く水（たとえそれが泥水でも）その一滴一滴のしづくの生きた声を聞き、その願ひ、この社会に反映しなければとの願いで一杯です。

代筆者 田代猛

# ききがき

Cさんのお話

## 私のきた道

石山ひろと

私は一九六三年（昭和三八年）に大阪で生まれました。三歳のときに母が結核にかかり、母とは離れて暮らし、病気が移ると言われてまったく会えず、その後病死したと聞かされました。私が小学校一年の秋、父は再婚し、彼女の実家のある三重へ私も連れて三人で暮らし始めました。

父は怒るととても怖く、口ごたえをしたりウソをつくと私を投げたり、家から放り出したりしました。

三重の小学校では「田舎者」と言われてずっといじめられました。よそから来た者をみな「田舎者」と言つたのです。マツ葉で足を刺されたり、教室で飼っていたドジョウを弁当箱に入れられたりしました。

二年生の年の暮れ、幼い頃からとてもよく遊んでくれた実家の近所の中学生二年生のお姉ちゃんが、自転車を無灯火で運転していて、曲り角で車にひかれて即死しました。それ以来自転車に乗るのは抵抗を感じるようになりました。

本を読むのが好きで、「東条英機」「宮本武蔵」の伝記や「ビルマの豊琴」などを読みました。将棋も本を読んで一人で覚えました。おしゃべりも好きで、学校への行き帰り、一人で天気予報やニュース・マンガの口まねをして歩いていました。

中学になつてもいじめられ、非行をするような男子にはよく殴られ、逆に女子には強気に出でていたので嫌われました。

高校でもいじめは続き、一年の音楽の時間に音楽教室でプロレスのようにパイプ椅子で何度も殴られました。これ以後、パイプ椅子やスリッパでよく殴られました。生徒会の会計を押しつけられて立候補したり、弁論大会で無理やりクラスの代表にさせられ

て発表したこともありました。中学の卒業アルバムは強制的に買わされました。高校のアルバムは買いませんでした。いじめられてばかりだったので欲しくなかったのです。

高校卒業後は自衛隊に入隊し、北海道網走で勤務しました。私は風俗には行かないので、余暇は音楽を聴いて過ごしました。小泉今日子・堀ちえみ・早見優のコンサートやライブハウスに行くようになり、レンタルレコードを借りて録音したテープも増えていきました。

このまま自衛隊にいても昇進は無理なので、二年で除隊することに決めました。除隊する少し前、私宛てに「あなたを産んだのは私です。あなたに会いたい」という手紙が届きました。母は私の小学校の在籍記録から探し出したようです。除隊直前まで会うかどうか迷いました。除隊して北海道を後にした私を、母は大阪空港で待つてくれました。

母は子づれの男と再婚していました。母の尼崎の友人の家に一週間ほど身を寄せていました、「コネがあるから仕事をしないか」と言われましたが、コネを利用するのが嫌だったので断り、母の再婚先の和歌山に行きました。父からさんざん言われて知つてしまましたが、いざ母と暮らしてみると、気が強くてそれが合わず、すぐにけんかをし始めました。

一九八二年三月にやめた自衛隊で貯めた百万をギャンブルやコンサートに半年で使い切りました。あの頃は荒れていて、「バクチをするな」と母によく言われ、けんかが絶えませんでした。親戚には「お前はやくざしかできん」と言われ、近くの母の実家へ移動したのですが、そこでももめて、更に母の兄弟である

おじさんの家に移り、そこから職安に行って、大阪の印刷屋に仕事を決めました。寮への住み込みで、八四年八月のことです。自衛隊をやめてから二年半が過ぎていました。

働き出して三年ほどたったある日、パチンコ屋でもめて、チップに殴られ金を奪われ、寮まで追いかけられました。退院後、

問題を起こしたと言うことで仕事をやめさせられました。八七年八月、JRコンテナの運送屋で助手の仕事をみつけ、働き始めました。ところが九一年一月仲の悪かった運送助手が私の悪口を上司に話し、やめさせられてしまいました。ここには四年二ヶ月いました。これ以後、半年以上仕事が続いたことはありません。当時すでに借金があり、校正や簿記・行政書士・気象予報士などの通信教育代や家賃の滞納、そして税金の催促も四万ほどありました。

すぐに新聞配達の仕事を決め、荷物をそこの寮に運びましたが、免許を携帯していなかったことでもめ、仕事を始める前に追い出されました。大量の荷物が路上に放り出され、福祉を通じて一時施設に十日だけ泊まれましたが、荷物の半分は捨てざるをえませんでした。歌手のテープ・CDや自炊道具のいくつかも捨てました。

施設を出たあと、西成の愛嬌センターで土木仕事を探しましたが年末で見つからず、仕方なく大阪駅東口で野宿をし、その年はそこで越しました。

九二年初め、大阪駅の手配師を通じて寝屋川へ行ってみるとタコ飯場で、賃金未払いのまま二月に八尾へ移されました。そこの飯場のおやじはいい人で「土木の仕事を覚えろ。あとで必ず役に

立つから」と教えてくれました。

六月板方の現場に行つたとき、そのまま歩いて監督署へ行つて未払いの申請をしましたが、門前払いをされ、歩いて飯場に戻ると、所長にそのことがばれて追い出されました。その日は八尾の公園で寝ました。市役所の総務課で事情を話し、荷物を預けて北区に戻り、職安で和歌山の住友金属の下請け会社に仕事を決めました。七月のことです。市役所に着払いでの荷物を送つてもらいましたが、今も未払いです。

一二月に金属不況でリストラの記事が新聞に載り、それを見て仕事をやめる決心をしました。クリスマスイブに、買つたばかりの自転車に乗つて大阪の職安に行きました。片道七十キロで、強風のため行きは海沿い、帰りは山沿いの道を走つて二二時間かけて往復しました。

九三年一月大阪市の警備会社に職を決め、住民票も移しました。しかし六月にやめさせられ、尼崎のセンターブール裏で野宿を始めました。八月に「夏場暑くて食べ物もない」と市役所に訴え、「あと一ヶ月すれば雇用保険がおりるから」と、それまでの一ヶ月分の生活費を貸してもらいました。これも未払いになつていまです。また警備会社の部屋も借りつ放しになつていきました。

秋に兵庫県武庫川にあるラクタイルの工場で働き出し、荷物も会社の寮に移しました。九四年二月会社からクレームがついてやめさせられ、四月始めには脱水症状を起こし、市役所でお金�を借りました。

## 路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

# 引き続き 求む！米、毛布、衣類、活動資金

新宿・池袋での越冬前段、年末年始の越年の取り組みは暖かいご支援の中、無事終了いたしました。ご協力下さった方々どうもありがとうございました。

が、もちろんこれで私たちの活動が終りではありません。越冬後段・冬の寒波が到来する中、これ以上の犠牲者を出すなど、夜間、日中の巡回活動、炊き出し、医療相談活動、福祉申請行動や交渉をご支援の程宜しく！

<連絡会NEWS 越年報告集発売中！>

新宿連絡会

東京都台東区日本堤1-25-11  
山谷労働者福祉会館 気付け  
☎090-3818-3450  
郵便振替口座  
00170-1-723682新宿連絡会

玉かけの免許をなくしたので再発行し、郵送してもらつたのですが、郵送ミスで結局届かず、思つた仕事が探せませんでした。仕方なく大阪の百貨店の商品仕分けの仕事を始めました。交通費・食費は母の世話をなりました。

母は「バイトじやいかん」と言い、借金も返さないので関係がまたもつれ出しました。そして「これで仕事を探せ、今後私のことを母と呼ぶな」と言つて、手切れ金三十万円を渡されました。

私はその金でパチンコやボーリングなどのうき晴らしをして遊び、使い果たすと和歌山の職安から玉かけを利用して板方の土木の派遣会社に九月中旬に仕事を決めました。一ヶ月には滋賀県彦根の鋳物屋に派遣され、埃っぽくてとても汚れる仕事をしました。

九五年一月一七日に兵庫で地震があり、仕事を二日休んで神戸へ行きました。父が明石に住んでいて、神戸の市役所に行つて死者名簿を探しましたが名前はなく、死んではいないのだと思いました。連絡はしませんでした。

三月に仕事をやめ、市民病院で健康診断を受け、同じ滋賀県の長浜でエンジンのインパクトボルト締めの仕事を始めました。仕事のあい間の五月には尼崎へ、七月には西成中央体育館へ行き、花を贈つて知り合いを激励しました。八月には高校野球を見に行くついでに国道二号・四号線を歩き、写真集も買い、それまで貯めていた折り込み求人広告を西宮市役所に持つて行き、求人に利用してくれ、と渡したりもしました。仕事を十月にはやめ、大阪と名古屋が長浜から同じ運賃なので、名古屋に行こうと決め、多重債務を建て直す勢いで名古屋に向かいました。関西から出て働くのは初めてのことでした。

名古屋ではお祭りをやつており、そこで財布を落としてしまい、仕方なくセントラルパークで野宿を始めました。篠島で炊き出しをしていましたが、気がひけて食べませんでした。

十一月手配師を通じて愛知県南部の西尾で鋳物の仕事を住み込みで始めました。食べ物は良かつたけど、安かつたので一ヶ月でやめて名古屋に戻り、公園で野宿をし、初めて炊き出しをもらいました。

翌九六年一月テキ屋に、見習いで使つてやると言われて仕事をしましたが、まともな金が入らず、その月のうちにやめました。三月に飯場に行きましたが、ケタ落ちで、金ももらわずに名古屋に戻り、駅で野宿をしました。

五月から十月までは車のシートの組み立てをし、十月に名古屋駅前で、自衛隊時代からの水虫で足の裏が切れて歩けなくなり、救急車を初めて呼びました。この時は福祉を通して保護施設・篠島寮に入寮し、ここから出かけて、日払い現金の立ちん坊を初めてしましました。寮の友人が、仕事の空きを紹介してくれ、寮を出て、高速道路の補強関係の仕事をしました。

九七年の年末年始はおけら公園で越年、これ以後仕事はすべて現金仕事になりました。

一月下旬から行き始め、三月下旬になくなり、中村区役所へ窮状を訴えましたが、まともに相手にされず、救急車で運ばれました。病院を出たあと、区役所前で抗議の座り込みを三泊四日しました。

四月三日に行つたのが最後の仕事になり、これ以後本格的な野宿になりました。

八月半ば県立図書館前で脱水症状を起し、救急搬送になりました。九月暴力団の抗争が激しくなり、危ないので、名古屋駅から若宮の高速道路下に野宿の場所を移し、一二月には一緒に寝ていた仲間に「声がでかい」「出ていけ」と言われて中村方面に移動しました。ここでは駅前のパン屋からフランスパンが拾えたので、この年の越年行動には参加しませんでした。

一八年一月、野宿の支援者が逮捕され、警察署に一人で抗議に行きましたが、虐待されて門前払いになりました。七月一六日の最後の抗議まで、計十三回行きました。

七月一七日東京に行く決心をし、昭和区鶴間から歩いて、水穂・熱田・緑・南。名古屋市を出て大府・東浦・半田・刈屋・安城。岡崎から一号線を豊橋まで、計五日かけて歩きました。豊橋の福祉事務所で隣の市までの交通費を法外の移送として出してもらい、以下同様にして浜松まで行き、そこで夕方になり、市役所が閉まっていたので近くの交番に行くと、警官がポケットマネーを出してくれ、磐田・袋井駅まで行き、そこで野宿しました。翌朝からも同じように、島田・焼津・静岡・清水・富士・三島、ここで日が暮れて野宿。交番で新聞をもらつて敷いて寝ていると、通行人が二百五十円を置いて行ってくれ、カップラーメンを食べました。翌朝熱海・小田原・平塚。日が暮れ、雨が降つていたので大磯ロングビーチの屋根のあるところで野宿。翌朝藤沢まで行きましたが、土曜日で市役所が休みになり、ここからなら歩いていけると思い、横浜・川崎、そして多摩川で野宿。

東京に入つて、大田・品川・青の横丁・乃木坂トンネルで野宿。早朝、赤坂の交番で日比谷公園の場所をきき、七月二六日朝

三時に到着しました。

以後東京では働いていません。不法なことをしてまで稼ぎたくないのですが、コンサートチケットなどの代理のならびには行きません。本や雑誌は売るためには拾わず、読むためだけに拾います。酒は飲めないことはないけれど、こんな生活をしているのでやめています。

東京に来たのは生活保護をとるために来たのではもちろんなく、生活するために来たのではない。今まで私が受けてきた数々のひどい対応を訴え、裁判に勝つために来たのです。

私はただ、裁判に勝つて名誉を回復し、働いて債務を返済して大阪に戻り、友人との仲を修復し、運送屋を首になる前の生活に戻りたいだけなのです。

バイオリズムって言うのかなあ。仕事を始めて、これで債務が返済できるなあと思い始め、うわ向きになつたときに、仕事がなくなつてより悪い状態になる。それの繰り返しだったような気がします。

この世に命あるものは皆おなじ。これが私の好きなことばです。



# 北国の街から——路上写真展の片隅で——

## 大久保

その女性は写真の貼られたパネルの前を、通り過ぎようか立ち止まろうか、迷つてゐるよう見えた。「よかつたら見ていくください」軽く声をかけた。

「こういう人たちはたくさんいるんでしょう」「ええ、そうなんです」二言三言の会話の後に、一瞬ためらつて「あのね……、私は他人事ではないの」と話しあじめた。

「私の主人だった人は、40年前に家を出ていったの。どこで何をしていたのか……、きっとこういう生活をしていた時期があつたんだろうと思うのよ。

出ていったきり、その後もうずっと音沙汰なくて、むこうの実家には時々連絡してたみたいだけど。それが……この前亡くなつてね。関西の方の病院まで長男夫婦が遺骨を引き取りに行つたんですよ。『看護婦さんや他の患者さんみんなが』いい人でしたよ』と言つてくれた』と帰ってきたからまあまあ最期は……まあ良かつたんでしよう。

ちょうどね、少し前にお墓を買つたところだったの。だから、そこに入れてね。全部済ませて。そうしたらね、その後で義理の姉さんが『あの時はすまなかつたねえ。子供たちを立派に育てて

くれて本当にありがとう』と言つてくれたの。主人が帰つてこなくなつてからしばらくは、むこうの実家との間にはいろいろあつたんだけれど、そう言つてもらつたら、私の気持ちもなんだかすう一つとして。それでようやく和解できたの。

主人はね、自分の親が経営していた会社に勤めていたんです。ところが、その会社をめちゃめちゃにしてしまつたの。家から勤めに出て何日も帰つてこないから、会社に電話するでしよう。何度電話しても、まだ会社に来てないって言われるんですよ。そんなことを何回もくりかえして。後からわかつたんだけど、会社のお金を持ち出して温泉旅館に行つて、そこでお金をばらまいていたらしいの。それを聞いた時は、もう情けなくてねえ。本当に情けなくて……。こつちは親子三人、明日食べるものもなくてどうしようと思つている時に。もう情けない、情けない。

私の母親が心配して、子供二人は育てきらないだろうと、少し余裕のある親戚がいたから、一人を養子にだしたらどうかつて言つてきたんだけど、それだけはできないと断つたの。子どもと離れたりしたら……。そんなことしたら私は……、もうとても、とても……。でもねえ、私の親は娘である私のことが心配でしよう。だからねえ。

私はね、勤めながら子供を育てたんですよ。あの頃は、魚屋でも八百屋でも行商してたから、朝勤めに行く途中で頼んでおくの『今日はこれこれをおいといてね』って。帰ってみると多くおいてあるのよ。『昨日はありがとう、助かったわ』というと、『いやあ、こつちも世話になってるから』と言つてくれてね。それから近所で農家をやっている人が野菜を持ってきてくれたり。そんなふうにしてなんとかやってこれたんですよ。こんなこと、今だから言えるんだけど。まあ、子供たちはなんとか二人とも悪くならずに育つてくれて。今はそれぞれ家庭をもつて。

だから、私なんかこういう人たちを見ていると気の毒にとは思うけれど、もう少しなんとかできるだろに、とも思えてねえ。女手ひとつで子供を育てることができたんだから。同情するばかりの気持ちではないのよ。もうちょっと、ねえ。いくらだつてあるでしょ。

ずっと前にね、東京の親類を訪ねた時に『いつしょに新宿に行ってみようか』と誘ってくれたことがあったんだけど……でも、行かなかつた。

そろそろ時間だわ。ごめんなさいね。初めて会つたあなたにこんな話を。この前から何回か、この写真の前を通つているんだけど、通るたびになんだか：こう…、胸がかきむしられるようで。写真を見ていて、この人知つてると言つてくるような人はいなかつたの？ そう、いないの

小柄でかわいらしい女性だった。40年前は30歳を少し過ぎたばかりだったといふ。

## 「季刊『Shelter-less No.4 1999 winter』好評発売中!」

### 目次

- なぜ怒りが湧きおこらないのか 読売新聞 原 昌平  
特集「大失業時代の野宿者」  
失業対策の過去と未来 都職員 金子 雅臣  
東京西部300人聞き取り調査報告 資料センター  
釜ヶ崎における高齢者就労対策 釜ヶ崎 NPO  
青山さん、おおいに語る 山谷労働者 青山 健  
飯場居住型層の飢餓貧困 山谷争議団  
寄る辺なき街角から—広島編一 広島夜回りの会  
野宿者と出会った若者たち  
野宿者と共に創る演劇 新宿むむむ団  
野宿者をめぐるニュースクリップ

A5判 84ページ 定価600円プラス税

次号予告 春号は「冬を越える」という当事者の声の特集。3月10日発行

発行：野宿者・人権資料センター 発売：現代企画室

書店でお求めいただくな、野宿者・人権資料センターにお申し込みください。

(年間講読3000円) TEL & FAX 03(3226)6845 Email YHY07064@nifty.ne.jp

# 越冬をともに過ごしたなかで 折口文

越冬活動のなかで野宿者の人たちとともに過ごすなかで、改めて感じたことを断片的に。

「この人はこういう人」というのを自分の中で一回持ってしまうと、そのイメージだけでその人を判断してしまっているように見える。どこの世界にいてもこういう人はいるものだけだ。だから、おじさんたちは縦じて人と関わりを持つのが好きな人たちなんだけれども、その点で損をしているというか、人付き合いが下手というか、そんなふうに感じた。逆に言えば、それだけ深いつながりをもたない、持ちたがらないということかもしれないのだが。

また、「俺が俺が」というか「仕切りたがる」人、自己中心的というか、目立ちたがり屋というか、そういう印象を与える人が多いことはたしか。加えて、逆に控えめすぎる人がいたりする。両極端のタイプがいるという印象。それが別のところであらわれると「極端な体育会系」になる。上下関係がはっきりしてる、いや、しすぎていること。「上下」を通りこして「主従関係」のように映るのだが。先に書いたけれど、深い関係を持ちたがらない、ということの裏返しなのかも知れないとも思うのだけれど。ちょっと複雑な思い。

こうした人間関係のあり方について、おじさんたちと関わりはじめるようになってから、違う形ではあれ、くり返し考えてきたように思う。

おじさんたちとはじめて接するようになった頃、①ずけずけものを言う、②言葉つかいが荒い、③強引（Going my wayとも言う）という三点には特に驚かされた記憶がある。驚かされると同時に、自分自身も正直に、ずけずけとものが言いやすい、という印象を持ったことも確か。そのためか、おじさんたちに対してかなり大胆な発言をくり返してきたわけだが…。そんな若輩者のわたしの大胆発言をも受け止めてしまう大きな度量のある人たちだなあ、という感慨も一層大きくなる。

その後、会社員のおじさんたちと接する機会があったが、野宿している人たちとあんまり変わらないねえ、という印象。さすがに「言葉づかい」は丁寧だけど、それだけに「ぞんざい」な感じを与えるし、あきらかに「年長だから偉い」という意識が見え隠れする。その点で、野宿をしているおじさんたちは正直者というか単純というか。変なプライドを隠しもっていないだけに、あんまり気負うことなく自分の言いたいことを言えたよう思う。今にして思えば、おじさんたちの他人に対する「距離のとり方」だったんだなど。

最後に、一番大きな課題として。やはりわたしはおじさんたちに「ボランティア」と観られているわけで、必ず「ご苦労さん」とか「ありがとう」と声をかけられる。声をかけられればやはり嬉しいのだが、極端な話し、声をかけられるような筋合いでないのでは、とも思う。静かな午後の一時に断りもなく聞入したり、気持ちはよく（？）寝ているところをたたき起こしたり、「無法者」なわけだから。それを思うと、「ありがとう」というその一言に、おじさんたちの「社会」に対する自己規定・自己判断が見え隠れするようで考えさせられる。と同時に、自分たちが何をしているのか、何が出来るのかなど、改めて自身の姿勢をも考えさせられる言葉である。

おじさんたちと話すことで、いろいろなことを考えさせられてきた。おじさんたちとの関わりが日常化してきたこの頃、初心に帰る良い機会を得た。

また、改めておじさんたちと自分との関わりを振り返る機会が与えられたことに感謝しつつ。

# ふくろうくん

アーノルド ローベル作  
三木 卓 訳

寒い夜、暖炉の前でゆっくり  
り晚ご飯を食べてくつろいでいるふくろうくん。玄関をたたく  
音がするので出てみると、ただ雪と寒さだけ。

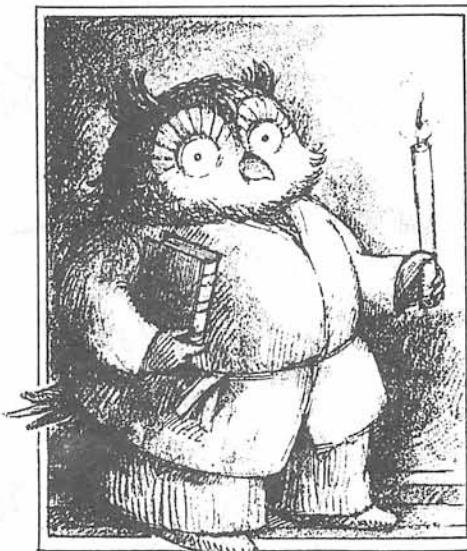
「ははあ、可哀そうな冬が僕んちの玄関たたいてたんだな。  
きっと暖炉のそばに座りたいんだよ。じゃあいいよ、冬を入れてあげようっと。」

さあ、それからが大変。冬が家の中を荒しまわり、じきに何もかも雪の下敷に。

「冬くん！君は僕のお客様だろ。そんなことするもんじゃないよ。」

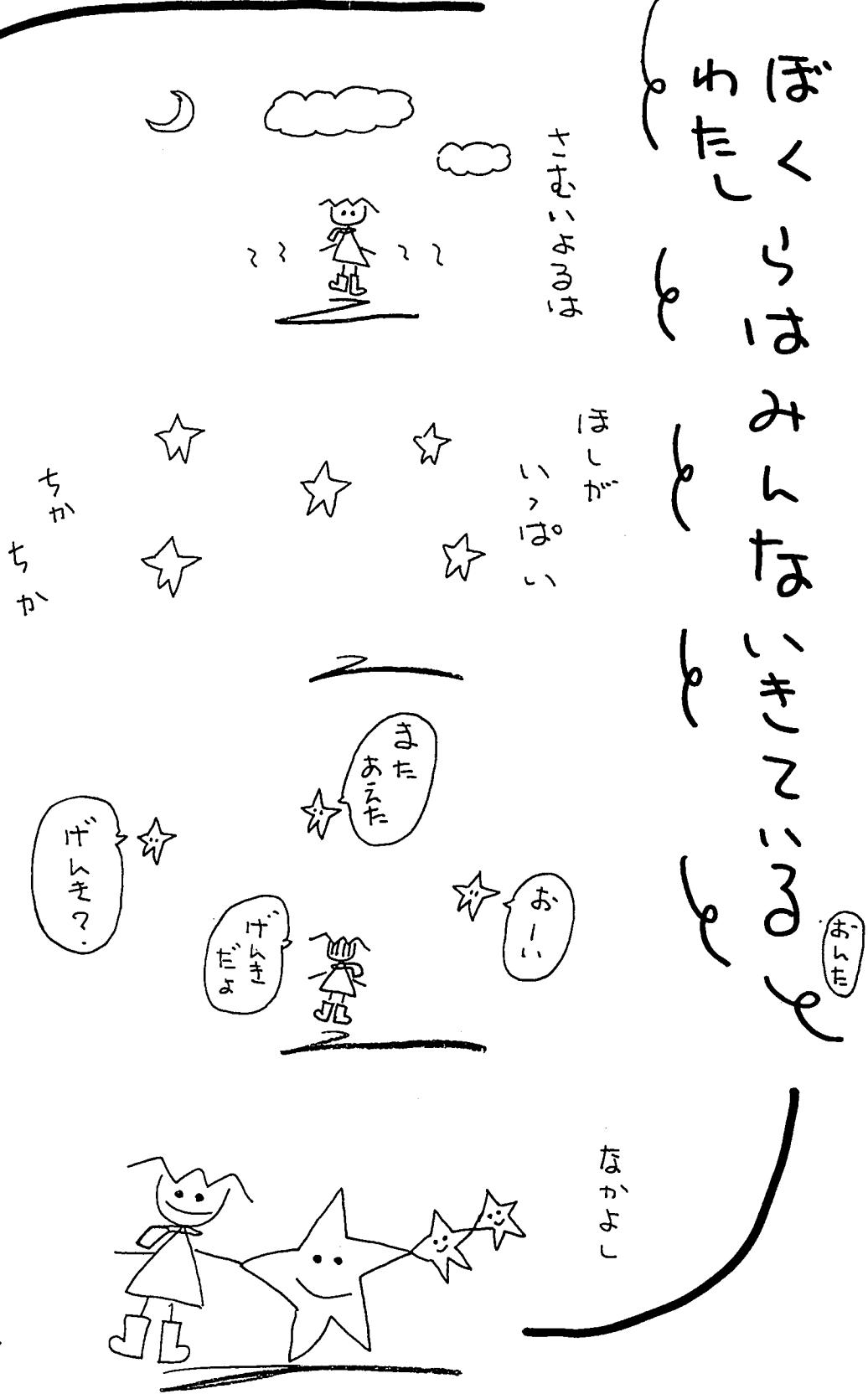
この話の他に、眠る時に見つけた2つの山が気になって眠れない話、涙のお茶を作ろうと、悲しいことを思い出し泣いている話、どうしたら、2階にいる時同時に1階にいられるようになるのか奮闘する話、お月様と友達になる話が収録されています。

さてさて、私はふくろうくんが羨しい！だってふくろうくん、どこか抜けているけれどお人好しで呑氣でマイペースなんだもん。こんな風に生きられたら、毎日楽しそう。そういえば、こういう人身近にいるなあ。



文化出版局 こどもの本

恩田 美代子



東京

第5卷

路上

散歩

スカウト

写真・岡田 知子  
文・笠井 和明

「北へ——池袋～巣鴨～王子」



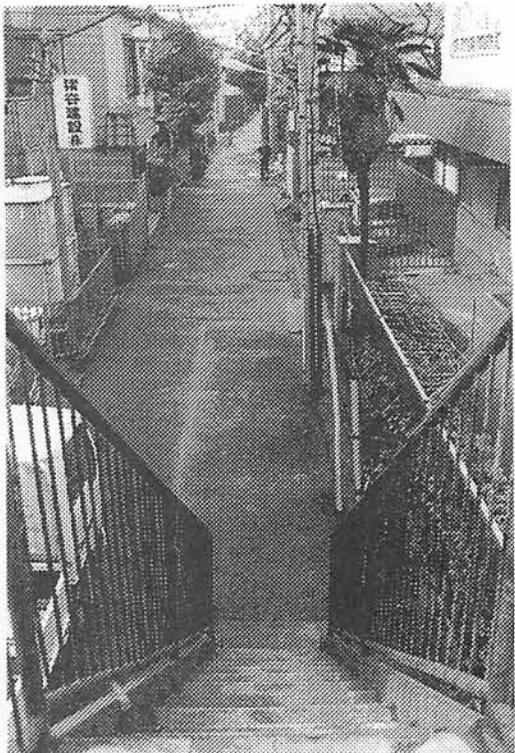
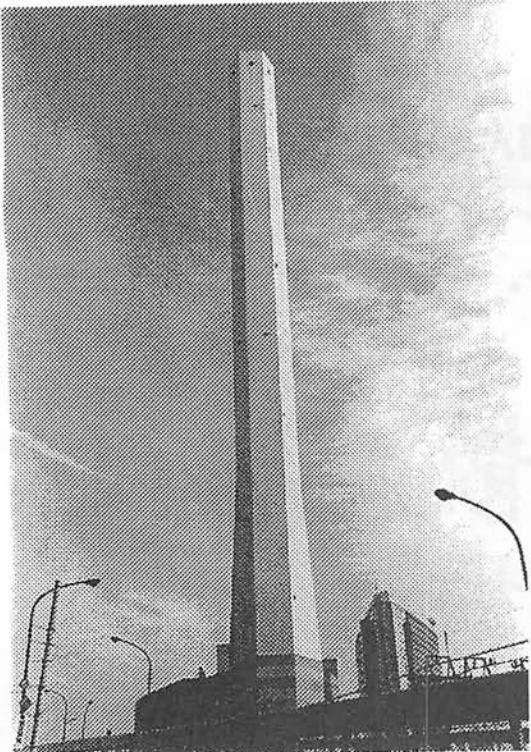
東京にも雪が降った。

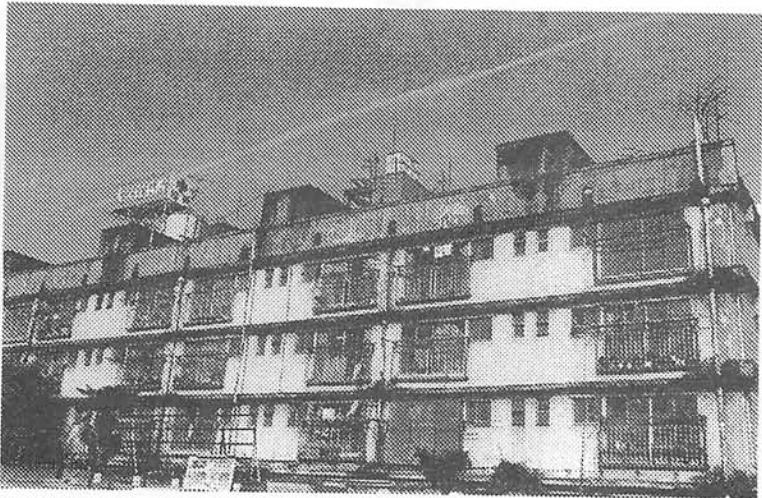
前夜からの雨が朝の仄かな明りの中、ひと粒ひと粒結晶に化していく様を中央公園の木々の中から見た。枯れた芝生と青いテント小屋の上に舞い降りた白い雪はけれどもそこに形跡を残すこともなく静かに消えていく。結晶の弱い雪は短命である。あと少し力があつたならばと悔やみながら水滴に戻る、宙に舞うだけの儚い白さ。その中途半端な美しさに惑わされような者が性懲りもない夢を見続けるのであろうか。そんな事を思いながらかじかむような寒さを忘れ雪の中に佇んだ。東京の雪はやがて冷たい雨に戻り、昼には寒さだけを取り残し去つて行つた。

東京にも時たまドカ雪が降り、慣れぬが故に都市機能が麻痺したり、凍つたアスファルトで革靴のサラリーマンがスッテンコロリンするが、その光景も暖冬が続くこの数年あまり見受けられない。たいがい東京の雪は中途半端であり、それが何とも愛しかつたりするのである。もつとも雪は積もらぬ方がおっちゃんのためには良い。摂氏一度か二度の差が生死を分ける路上にとつて底冷えを悪化させる雪は最大の敵でもある。そんな自然への怯えはあるにはあるのだが、他方で雪に愛しさや安心感を感じてしまうのも困つたものである。

寒くなると北へ行きたくなるのは臍曲りの証拠なのであろうが、列車にのつて青森までいく訳にもいかず、その気分だけを残しながら今回の東京ふらり散歩は池袋から北への徒步の旅となつた。

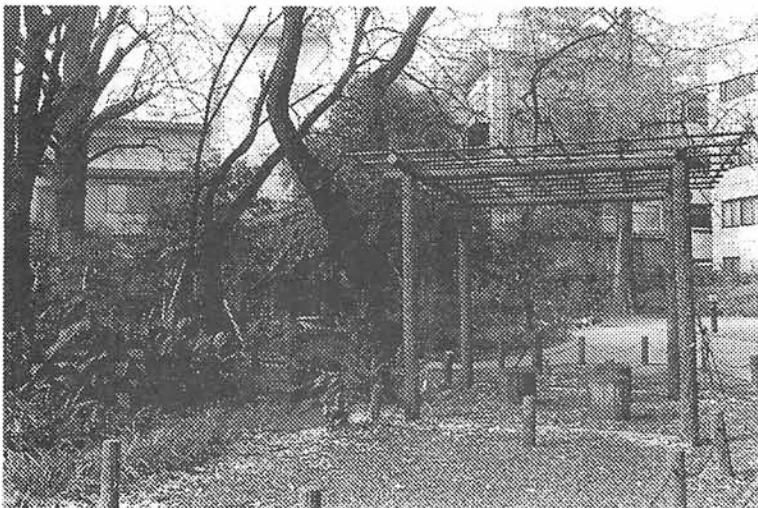
池袋駅の北口からは高い煙突が見える。この周辺を歩く時、どこへ行つてもこの煙突に見張られているような気がしておかしな気分を味わうのであるが、それがサンシャインビルや都庁舎ではなく、唯の清掃工場の素つ氣ない煙突であるのが何とも言えぬ所。





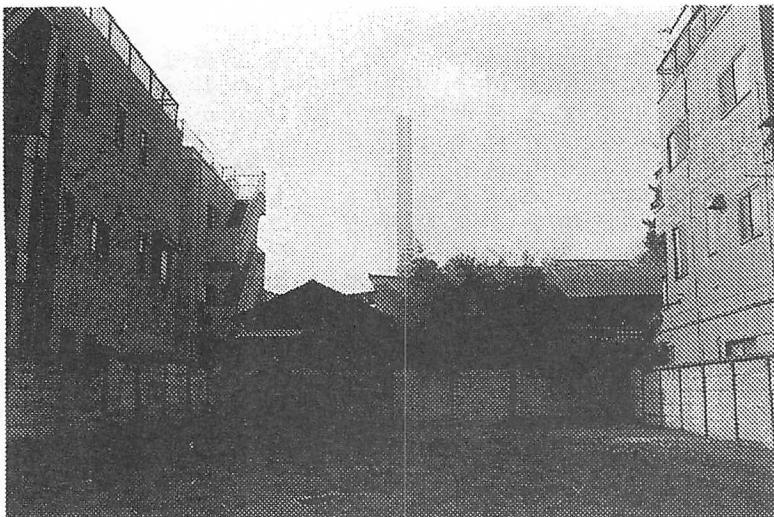
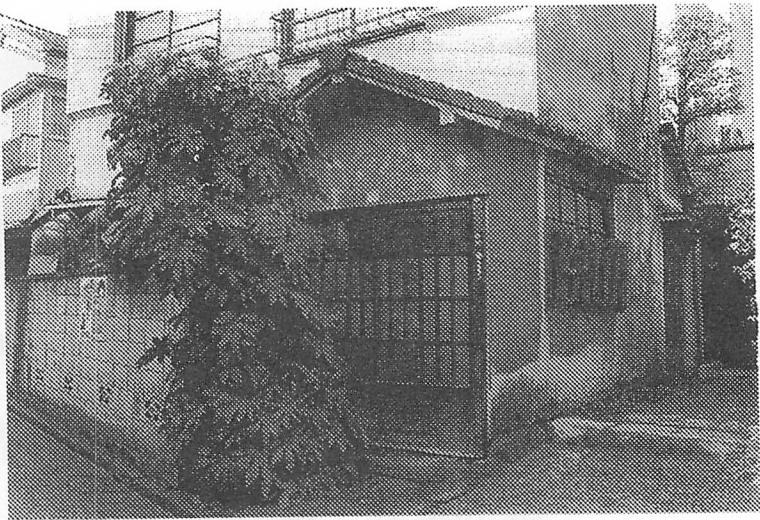
おそらく周辺への公害環境を考えてこんなにも高くしてしまったのだろうが、煙突というどこか哀愁を帯びた構造物が駅の真近にテンと立つているのが池袋らしさを醸し出している。池袋の街はどこか北関東の地方都市を思わずような街並をしている。木曽路につづく江戸の面影か、川越街道や東北道につづく近代の面影なのか、関東、信越に続く大平野の匂いや生活感といつたものをどことなしに感じさせる街である。

言うまでもなく池袋の街はサンシャインセンターや芸術劇場を有する都会であり、都内有数のターミナル駅である。けれどメトロボリタンプラザ前に民家が突然出没したり、雑居ビルの谷間に戦後バラック風情が未だに残る人世横丁があるのも池袋である。北の方へ行くと、古びた都営住宅が場違いに聳え、風俗店や飲食店やラブホテルが何の秩序も持たずごちゃごちゃとあり、そんな中に病院まであり、そとかと思ふと平和通りの片隅には池袋の森公園が森林を残し、簡易宿泊所や木造アパートなどがこれまた秩序もなく狭い路地にごちゃごちゃとある。けれど、それが調和さを何故だか保つて安心感があるという誠に不思議で愛しい街なのである。おそらくこの街は何かに秀でるという発想や執着を持たないようで、それが秀でて分化された新宿の街との決定的な違いなのであろう。中途半端な街の作りの中に良く言えば平等感覚とでも言おうか、北関東の平原性のよう

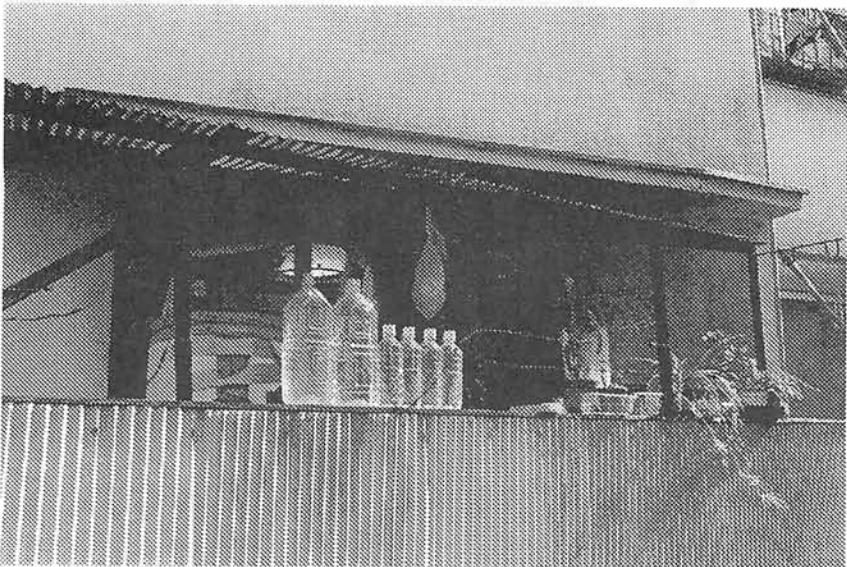


なものを感じるのである。

実を言うとこの池袋の街の良さに気付いたのはここ数年の事で、それまでは何ともない平凡な都会の街としか思えなかつた。嗜めば嗜む味が出るではないが、歩けば歩くほど理解できる街というものはあるもので、最近は池袋におおつちやん達は幸せだなどと変な羨望をしたりもするのである。安らかな街は安らぎを求める人を集める。池袋のおおつちやん達のどこかほんやりとした所は、この街を求めた理由とこの街の特性がうまく合致したからこそ醸し出される美德である。もちろんそこは安住の地ではないだろうが、けれど東の間だろうが、人は安らぎや夢を求めたがるものである。求めて何が悪かろう。



煙突の視線を気にしながら川越街道の歩道橋を渡り、池袋本町や上池袋の狭い路地を巡ると下町風のしもたやが延々と続く。清掃工場に隣接するスポーツセンターの最上階からも確認でききるのだが、この北関東へと続く広大な平野には高い建物などほとんどまるで台地に住宅が敷き詰められているようである。確かに高い所からみればのっぺりとした特徴のない家並なのであるが、地面の上を歩いていると景色はまるで違つて見え、小さな住宅一つひとつに、時代のそして生活の色合いがある。猫の額ほどしか庭のない家であつたり、窓のベランダに小鉢しか置けないアパート暮らしの生活は確かに窮



届かも知れない。日本の住宅事情を「うきぎ小屋」とは良く言つたものが、それでもその窮屈さの中からほのぼのとした安らぎや夢をつかめるのならそれはそれで良いではないか。高層マンションなどを見れば見るだけ生活が外面も画一化されてしまう恐ろしさを感じてしまうし、そんなの都市でも何でもない！と呼びたくなる。煙突や鉄塔など高い構築物はそれでは景観にニュアンスを作るのだろうが、人の生活までもが高層化してしまうのはいくら何でも不自然極まりない。木造住宅は耐火性や耐震性がないと都市計画の嫌われものであるが、人の作ったものはいずれ滅びる。それを無理に壊して永遠や絶対の安心なんていうものを求めようとするとがそもそもその間違いなのである。これら木造住宅にすら住めないおつちやん達の営為を見ればわかる通り、公園の空き地や河川敷の遊休地があればそこに自分の屋根を作る。それがたとえ「不法占拠」とは言え、人としての安らぎを求めたいが故の営為であり、そこに本来の姿の家がある。不安定な仮小屋暮らしは窮屈かも知れぬが、窮屈さを厭わないものがそこにはある。人の生活は床面積や構造的な強固さでは決して計れない。

静かな住宅街のほのぼのとした空気に浸つていると、公園で餌を探す鳩も、路地を自由に行き来する猫にも親しさが沸いてくる。

安らぎと夢、そして、秀であることへの不安。そんな事をふと思わせる、ほんやりとそしてなんとなく安心感のある池袋の街は素敵である。

北へ向かうはずの旅はこのように池袋的魅力にズッボリはまり込んでしまったが、ここは思い切つてガン研の脇を通り西巣鴨に渡つてみる。こちらも住宅地であるが多少高級さを増し、木造住宅が少なくなり、庭も広くなっている。こうなつてしまふと現金なもので街に対する共感は薄くなり歩調も早まつてしまう。その歩調を止めたのが更に北まで行つた旧中山道のごちやごちやした商店街。

都電庚申塚駅前通り巣鴨庚申塚の猿地蔵を見学し、方角は違うが、あれよあれよと言う間に巣鴨地蔵商店街の活気につかまり、とげ抜き地蔵



のある高岩寺で初詣までし、終いにダンゴまで食つてしまつた。活気といふものには凡人は勝てないもので、新宿の炊き出しでも良くあるのだが、人が群れているとついつい必要でもないのに並んでみたりと、そんな引き合う力というものがあるようである。なんとなくの力なのだがこれも決して捨てたものではない。僕らは合理主義というものにはつくづく無縁であると思うのである。ついでだから心のトゲも抜いてもらおうかと思つたのだがこれだけはさすがに止め、お香の煙りを頭につけるだけにして、元来た道を人込みにまぎれて戻る。

「おばあちゃんの銀座」と言われる商店街だけあってじいちゃん、ばあちゃんが確かに多い。商店も衣類、雑貨、食品、食堂、土産屋、カラオケ、金魚屋などなど実にバラエティに富んでいて飽きが来ないし、値段も安い。その名に相応しく老人が日永一日遊んでいける街である。おそらく地元の人よりも余所から来た人が多いのだろうが、老人福祉だ在宅介護だとか言う前にこういう活気ある街をもつと沢山作れば良いのにと、思わず考えざるを得ない。ここもまた都市の歪みにより秀でてしまつた街であろうか。

庚申塚まで戻りお岩通りを北上して巢鴨五丁目の古い住宅地にまたもや足を取られながらも北区西が原までようやく辿り着く。本郷通りを渡り、一里塚跡の脇を入れると七社神社という清楚なたたずまいの神社があつた。ここらは鬱蒼



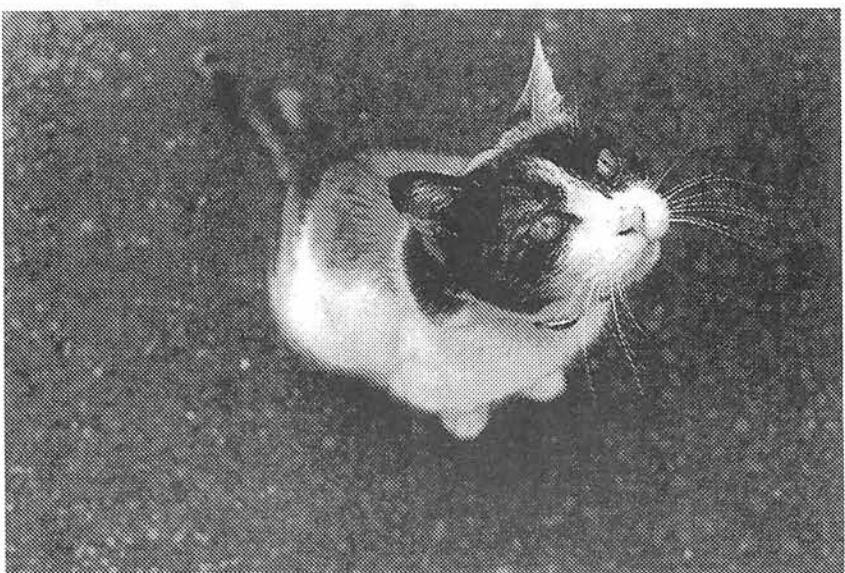
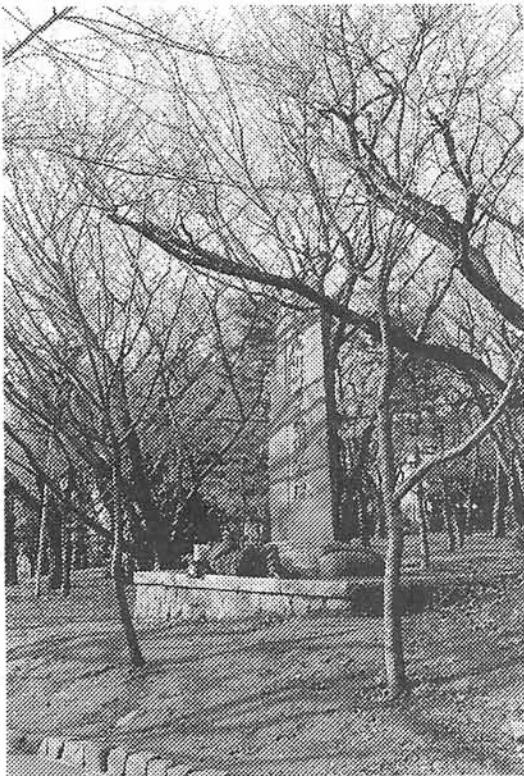
とした森が飛鳥山公園へと続く名所である。

ここでなんとなくおみくじを引くとやはり「小吉」。

夢は叶うか叶わぬか、王子の神様も「まあね」と微妙に微笑んだ。

その微妙さ加減に何故だかほつとするのだ。世紀が変わろうとしても僕らはこんな小さな事に喜んだりがっかりも出来る。そのなんとなきがおそらく夢と安らぎの正体なのであろう。それを思うと人の夢と書く傍さも決して悪い事でもない。傍さを感じるのは、それだけ夢をみて来た証拠である。たいそうな夢ではなくなんどない夢を沢山見たいものである。秀でることなく、人から中途半端に思われるようとも、路上の小さな事に喜怒哀楽を感じられるような小さな夢を。

飛鳥山公園で家族連れが楽しむ様子をぼんやりと眺め、王子駅のガードをくぐり北トピアに登り展望室から今来た道を探していると、池袋の高い煙突がはつきりと夕暮れの中に見えた。まるでここに戾つて来いやと目印を示しているかのように。



## 露宿の本棚

# 『下降生活者』

「見るまえに跳べ」に収録

大江健三郎 著  
新潮社文庫

も、空虚な言葉の羅列のように感じなかつた。言つてゐる事がわからなくとも、自分の存在をかけるかのような彼のその迫力に魅かれていた。

それからしばらくして、自分の本棚に、買つたまま読んでいなかつた大江健三郎の本を見つけた。あることすら忘れていたが、もしやと思い、中を見るとやはり、何の縁かこの「下降生活者」が入つた文庫本だつたのである。

小説の主人公は、九州の貧しい農村から、官立大学の助教授になつた男。自らの出身に恥辱を感じ、それを乗り越えるため、東京の優秀な大学の最も若い助教授として輝かしい出世のコースを昇つていてことを語る。

「血縁や家族歴、出身地方、それらがもつていて、あるばくぜんとした制動効果をまぬがれようとした。僕は、いわば自分の皮膚を漂白して、白人の領域に入りこみそこで成功しようと望む黒人のような存在であつた。僕は裏切り者の黒人であつた。」

過去を意識するが故に自らと切り離し、成功により過去を乗り越えようとしていた彼の内面に、破局への予感という、ある変化が訪れる。

「きわめて深く僕の内部に根ざした不安が、確固として僕をとらえていた。不安は、血液の局部集中のように、内部から、とどめる事のできない力でおしよせてきた。僕は、不安によつて全肉体、全精神に勃起させられていたのだ。」

彼は山谷から來ていた。僕の持つっていたビデオカメラを見つけ、話しかけてきた。映像とは何か、と語り出したが、喋りは尽きることも途切れることもないまま、様々な事柄に発展していく。そのうちに何故だか、大江健三郎の話になり、「下降生活者」に移り、また映像とは何か、と話し出す。

こつちは一向に話がつかめぬままに、その気も狂わんばかりの言葉の洪水を浴び続ける。ただし、奔放に飛んではいて

性愛です〉この呼びかけに答え、若い男と関係を持つようになる。

若い男に対し「架空の自分」を作り、その架空の人生を語る。こうなりたかった人生的願望を語り、振る舞うことで、自己の同一性を保つ。そして次第に、現実の自分が稀薄に感じられ、「架空な自分」が眞の自己のようを感じるという逆転が生まれる。

しかしある偶然の出会いによって、彼はその二重生活を止めることを選び、昇り続けた者として、彼は落ち続ける。すべてを捨て路地裏で生き、同性愛の仲間と付き合い、饒舌に喋る。

# 見るまえに跳べ 大江健三郎



見るまえに跳べ

大江健三郎

お 9 8 新潮文庫

新潮文庫

こうありたいと願う自分の姿とはなにか、自分が自分らしく感じられる存在であるとはどのような姿なのか。それは人様々であるはずだが、多くの場合、深く掘り下げられる事もないまま、落ち着いてしまう。もしくは落ち着かないままにそこに居続ける。

大江健三郎はそこを社会的な上昇、下降という形を使い、描いたのではないだろうか。主人公が堅ちていくことは、それが彼の理想だったわけではない。彼が生きてきた上昇の中で失ったものを取り戻すために、その下降の生活に進んでいたように思える。

僕自身はこの短編と共に、労働者として生きてきた山谷の彼がこの話に共鳴した事にも魅かれる。山谷の彼がどんな思いでこの小説を読んだのか、なにが結び付いたのか知りたいと思う。

人は他者と向き合うことで自分を知る、というが、僕も彼の話を聞くことで、きっと自分を引き付ける何かを知つていいのだろう。その時も、彼の話は飛躍に飛躍を重ねるだろうが、僕は出会いのきっかけとなつたビデオカメラを持って彼の話を聞くつもりだ。

飯田 基晴

# 「ポンヌフの恋人」

1941年  
フランス

監督・脚本 レオス・カラックス

うなほどにあざやかに描きだされた映画だ。

ある日、アレックスは脚を折ってしまい、収容施設に入所させられる。次々と、野宿生活のためか身体が汚れてしまった老人や、酔っぱらってケガをしている中年男性、中途半端らしい入れ墨の若者、女性など様々な野宿の人々が収容されてくる。浴場では人々の疲れた肉体が生々しく晒される。若者が老人を、男が女を殴りつけていたり……詳いと管理が剥き出しになつた汚い建物だ。同じく収容された男から「自分の人生を精一杯生きろ……よく考えろ。手遅れになる前に」と話しかけられるが、アレックスは「橋に戻る」とだけ応えるのだった。

橋に戻ったアレックスは、画材と猫を伴つて野宿しているらしい、片方の目に眼帯をした若い女、ミシェルと出会う。路上に漂着し、行く当てを無くした彼女に、アレックスは自らの肖像画を求める。二人は河の辺で初めて向き合うが、彼女は彼を描いている途中で失神。虚ろな意識の中で彼女は「ジュリアン」と名を呼ぶ……。ミシェルは初恋の相手に去られ深く哀しみ、探し続け、失明の危機に晒されているのだった。そんな彼女をアレックスは庇う。彼女は徐々に見えなくなつていく目で路上の絵を描き続け、彼は大道芸で稼ぎつつ、二人は橋で野宿生活を続けていく。

パリの街は革命200年祭を迎えていた。夜空に打ち上がる花火を見てミシェルは「私も撃ちたい……みんな巻き添えよ」と叫び、拳銃を乱射する。アレックスもまた、世界の全てに向け敵意を込めた弾丸を撃つ。そして、炸裂する花火の下、橋の上で壊れた玩具が人形の様に踊りまくり、抱き合う二人の姿は狂おしく華麗だ。疲れたミシェルは眠りにつくが、眠ることが出来ず独り取り残されるアレックス。彼は、彼女への想いをスケッチブックに書き付

けた。

だが、「あいつ、愛してない」とつぶやく彼に、「お前も愛情を、優しさを求めているのか? 人並みに。愛などここにはない。ここに必要なのはネグラだ: 娘は追い出せ」とハンスは迫るのだった。街はまだ目覚めていない。

翌日、ハンスはミシェルを橋から追い出そうとするが、彼女は激しく拒む「私にだつて訳があるわ……どこに行けと言うのよ」。ハンスは独白する: かつての伴侣が、幼い娘を亡くした哀しみから家出し野宿者になり、「わしもそうした: 一緒に」自らも住まいと職を棄て野宿する様になつた過去、彼女は路上で葬つたと。そして「わしらはこうしか生きられん。だが、あんたは違う。出て行け、そして: 生きろ」とミシェルに投げかける。束の間、ハンスとミシェルは互いの傷あとを共感する: それが互いの心の壁を越えて繋ぎ合わせたのか。そんなひとときの後、夕日が射し風が吹く橋の上で、ミシェルはアレックスの想いに応える。彼は河を、彼女は空を見つめたまま、すべての外で。

二人は海で「水平線が見えない。遠くが見えない。あんたは海を前にして足もとしか見てない:」「橋へ戻ろう」「戻ろう」とことばを交わす。どこかで見たかもしない情景。砂浜に走り去る二人の足跡が残される。

薄汚れた地下通路を寄り添い歩く二人。そこでアレックスはミシェルの顔写真入り『尋ね人』のポスターに出くわす「失踪中のミシェルは失明の危機にあつたが手術によつて回復の見込みあり」。ミシェルの父が彼女を捜しているのだった。アレックスは怖れに駆られた様にそれを破つて剥がし、同じく地下通路に無数に張られたポスターに火をつける。燃え上がるミシェルの顔と壁を背に走り去る。ポスターを張つてゐる現場に直面した彼は、手違

いでその労働者をも燃やしてしまう。

しかし、ミシェルは『尋ね人』の知らせをラジオによつて知つてしまつた。「治る: 悪夢が終わる」と解放されたかの様に彼女は喜ぶのだが、路上で彼と寄り添つて生きたことも彼女にとつては悪い夢だったのか。意識せずに求めていた絆に手が届いた束の間の夢だったのか、アレックスにとつては: 「雨の中で悪い夢を見た: 橋にお前がない」。

夢の続きを、観てのお楽しみであるが、微かな光が洩れ見えて物語は終わるだろう。

うつむき、心を閉ざした、常に孤独さを漂わせてゐるアレックスは、監督のレオス・カラックスの分身でもあるのだろう。カラックス自身も「なぜ映画をつくるのか? 話すべき相手がみつかないから、ということがよくある」とも言つてゐるのだから。

アレックスとミシェルが傷つけ合つた後:。胎児の様にうずくまり顔を両手で覆つた彼を、彼女は「殻から出るのよ。一緒に生きたい:。心を開くのよ」と引き剥がそうとする。寄り添う彼女も「私のこと、いつか話すわ」と言つたまま、彼にすべては伝えではない。しかし、共に果てまで巡ることができるものかもしれない。

ポンヌフ橋: パリの街の中では何の変哲も無い唯の橋だそうで、ポンヌフ橋: パリの街の中では何の変哲も無い唯の橋だそ�である。

## 関屋光泰

# はり師いが丸の 肝心かなめ

はり師 いが丸

手塚治虫の「ブラックジャック」の中に「ハリ師琵琶丸（びわまる）」という人物が登場する。

「ひっひっひっひっ」という笑い声と共にぬらりと出没する盲目のハリ師で、難治の病にかかっている人にハリをぶすっと刺し、「むむっ手ごたえあり」と呟いては去ってゆく、独特の風貌のキャラクターである。私のいが丸という名前はここから頂いたものだ。

その琵琶丸の使う鍼と、ブラックジャックのメスを研いでいるのは同じ刀鍼治で、ある日ふたりが彼の家に居合わせたところ、その職人が突然倒れる。琵琶丸が鍼を打っても効果はなく、ブラックジャックも開胸し、心臓マッサージをしてみたが、結局彼は帰らぬ人となってしまった。

この職人は自分の死を予測していたらしく、のちにふたりに宛てた遺書のような手紙が見つかる。

「天地神明にきからうことなけれ。おごるべからず。生き死にはものの常也。医道（いみち）はよそにありと知るべし」

ブラックジャックは、この言葉の意味が「わたしには一生わからないかもしれない。わたしには切るだけが人生なんだ」と呟く。

この言葉は人によって解釈が異なるかもしれないが、確かに医道が人の生死にのよそにあると思うことは少なくない。今日マスコミで流される医療に関する報道は、どれもが緊迫した臓器移植であったり、遺伝子治療であったり、どれもが一般人には絶句させるほどの驚愕を伴うものである。そういった医学の驚異が生きていく上での安心につながるかというと、そうとは限らない。力や金による命のランク付けがむしろ加速されるような気がするからだ。

ちなみに「肝心かなめ」という内容にそぐわないタイトルは、「露宿」編集部から創刊時には「東洋医学の話をしてもほしい」と言われたため、とりあえずつけてみたもので、書き進めていくうちに完全に浮いてしまった。（東洋医学では、五臓六腑の五臓（肝、心、脾、肺、腎）のうち、肝と腎が重視されることが多いのである）

東洋医学の話？それはまた今度。

「露宿」第6号は4月25日発行予定です。

原稿、広告の締切りは3月19日(日)必着となります。原稿の様式、形式は一切なし、ペンネーム可、広告の裏でもビラの切れ端にでも思った事をどんどん投稿して下さい。投稿は郵送、FAX、手渡し、口答、何でもござれ。心暖まる作品、批判精神たっぷりの作品などこころよりおまちしております。

\*\*\*\*\*  
《定期購読のご案内》

日頃から露宿をご愛読くださいまして、ありがとうございます。露宿の販売店が少なく購入し難いという皆さん、露宿を毎号確実に読者のお手元に届けるため当方では定期購読を承っています。ご利用下さい。またこれまでの年間購読費(年5000円)が実買価格より高いという声があり検討した結果、以下の通りに変更させて頂きます。

定期購読8回分 5000円(郵送費込み)

定期購読4回分 2500円(郵送費込み)

尚、すでに定期購読をお申し込みの方は申込のあった日から8回分の露宿をお送りしますのでご了承下さい。

《申込方法》

郵便振替用紙(郵便振替口座00170-1-723682新宿連絡会)に露宿定期購読8回分ないしは4回分とお書きになり住所・氏名を明記の上送金をして下さい(発行ごとに郵送します)。尚、現金の他、切手での受付もしております。封書内に住所・氏名を明記の上、切手を同封して下さい。申込は何号からでも結構ですが、4回、8回サイクルで行ないますので、途中での解約、取り消しはご容赦ください。

《バックナンバー・まとめ買い》

バックナンバーをご希望のお申込がたくさん寄せられております。創刊号、3号、4号は在庫がありますが、2号が品切れとなっています。お申し込みは郵便振替か封書またはFAXにより早めにお願いいたします。

またお得なまとめ買いも承っております。2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円となります。

露宿 ROJUKU  
はココで買えます。

◆模索舎 東京都新宿区2-4-9 TEL/FAX 03-3352-3557◆TACO ché 東京都中野区中野5-5-2-15  
中野ブロードウェイ3階 TEL 03-5343-3010 FAX  
03-5343-4010◆野宿者・人権資料センター 東京都  
新宿区大京町3新大京マンション304号TEL/FAX  
03-3226-6845◆山谷労働者福祉会館 東京都台東区  
日本堤1-25-11 TEL 03-3876-7073◆新宿中央公園ボ  
ケットパーク(毎日曜午後6時から8時まで)  
TEL090-3818-3450◆石手寺 松山市石手2-9-21  
TEL089-977-0870

『人生の重み感じて編集するまづい』  
露宿となり  
今回初めて編集を担当してなぜか目が潤んでしまいました。徹夜続きのあくびのためか、投稿者の思いに胸打たれたからか…。  
前編集者の苦労身にしみる冬の夜。春が待  
ち遠しいです。  
(お)

編集後記

# Rojuku

定期購読大募集

♪露宿を置いて下さるお店・スペースを探しています。お気持ちのある方はぜひご連絡下さい。まとめ買いの場合は、とてもお安くなります。

♪露宿では広告を募集しています。又、投稿お便り、大歓迎です。下記住所のほか、「露宿ペン俱楽部専用ファックス」03-3378-8761がございます。「露宿」の注文・原稿送付・広告申込・お便り等、何にでもお気軽にご利用下さい。

「ろじゅく

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくれました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

☆購読費・カンパ送り先☆  
郵便振替口座  
00170-1-723682  
「新宿連絡会」

路上文芸総合雑誌『露宿 (ROJUKU)』第5号

2000年2月25日発行（隔月刊）

主宰：笠井和明 編集協力・販売：露宿ペン俱楽部

発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）  
111-0021 東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け

tel 090-3818-3450 fax 03-3378-8761 印刷：株式会社 ラジオグラフィー